

「障がい者スポーツボランティアモデル調査研究」

障がい者スポーツボランティアモデル調査研究委員会

会長 大浜あつ子

(NPO法人スマイルクラブ 理事長)

A 本研究内容について

1 研究課題

2011年にスポーツ基本法が制定され、国民すべてのスポーツ環境の充実が謳われ、その中でNPO法人スマイルクラブのような総合型地域スポーツクラブ(以下 地域スポーツクラブ)の推進等も盛り込まれている。また2012年ロンドンオリンピックパラリンピックでは、オリンピックレガシーとしてボランティアによる地域コミュニティの強化、パラリンピックによる障がい者スポーツの向上などが報告されている。しかし、日本でのオリンピック・パラリンピックが2020年に開催されるにも関わらず、日本での障がい者スポーツやそのボランティア等への支援環境は未整備の状況である。国としても、ようやくスポーツ庁としてスタートしたばかりで、都道府県、市町村レベルでのそれらの環境は整備されていないのが現状である。

2 本研究の目的

本研究の目的は、東京オリンピック・パラリンピックを迎えこれからさらにスポーツに対する関心や期待が高まってくる今日、まだまだ未整備の状況にある障がい者スポーツの領域で、スポーツ基本法でも期待をされている地域スポーツクラブにおいて、地域コミュニティ強化にもつながるボランティアの現状把握にある。このことを通じこの領域におけるボランティアの課題整理と、今後の日本での障がい者スポーツボランティアのあるべき姿(パースペクティブ)の描き出しをねらいとしている。

3 研究の意義

順天堂大学黒須充教授は、日本のみならず世界の地域スポーツクラブの調査をおこなっており、特にドイツを中心にその研究をおこなっている。その中でドイツの地域スポーツクラブの社会公益性について触れている。これは、そのクラブにおいて、あるスポーツが好きな人たちだけが楽しんでいる同好会的なクラブ(たとえばサッカーが好きな人たちだけのクラブ)ではなく、スポーツが障がい者や高齢者などの福祉領域や心臓リハビリプログラム等医療と連携した領域など、幅広くいろいろな方々から支持されるクラブの必要性(社会公益性)を述べている。残念ながら日本の地域スポ

ーツクラブは、ここまでに至っていないのが現状である。このような状況で、今回の研究は日本がスポーツ（特に障がい者領域のスポーツボランティアの視点から）という新しいキーワードにより、よりよい地域づくり、社会づくりに貢献できることが期待できる。特にボランティアについては、オリンピックレガシーにあるように、地域コミュニティ強化にもつながっていくことが考えられ、今後の新しい地域コミュニティ形成のひとつのキーワードになるものと期待している。

4 研究の概要

事務局の設置

本調査研究事務局を設置し、事務局責任者として大浜三平を配置する。

委員会の設置と開催・・・年間3回開催、委員は下記（敬称略、順不同）

- ・大浜 あつ子（NPO法人スマイルクラブ理事長）
- ・行實 鉄平（徳島大学総合科学部准教授）
- ・黒須 充（順天堂大学スポーツ健康科学部教授）
- ・荒木 雅信（大阪体育大学体育学部教授）

オブザーバーの設置（敬称略、順不同）

- ・千葉県教育庁教育振興部体育課指導主事 加藤 俊文（現松戸市立松戸高校校長）
- ・柏市教育委員会生涯学習部スポーツ課統括リーダー 橋爪 良洋
- ・毎日新聞社オリンピック・パラリンピック室兼社長室 山口 一郎
- ・日本障がい者スポーツ協会課長 滝澤 幸孝

5 モデル調査の実施

NPO法人スマイルクラブをモデルに障がい者スポーツの指導に携わっているボランティア

を対象にアンケート調査をおこなう。

6 報告書作成

調査結果からの結果考察と課題についてまとめ、報告書を作成する。同時に、アンケート調査項目についても検討をおこない、今後の日本の地域における障がい者スポーツボランティア調査のモデル化を試みる。

7 学会等への投稿

本研究成果を学会等で発表をおこなう。

学会発表は、日本体育・スポーツ系学会 第40回大会（2017年3月21日～23日 鹿児島大学）の一般研究発表にて徳島大学 行實先生が発表予定です。

B 本研究成果について

本研究結果から、以下の研究結果と課題が把握できた。

《研究結果について》

1 参加動機は8要素

本調査の結果、障がい者スポーツボランティアの参加動機は、「F1.自己評価・報酬」、「F2.障がい者支援」、「F3.レクリエーション」、「F4.スポーツ支援」、「F5.社会貢献」、「F6.自己成長」、「F7.交流」、「F8.習得技術発揮」の8要素であることが確認できた。また、全体的には「F1.自己評価・報酬」動機が低い傾向がみられた。さらに、参加内容別では、「教室」参加者は、「イベント」参加者よりも「F5.社会貢献」動機が高い傾向であることが明らかとなった。

2 イメージの変化は4要素

本調査の結果、障がい者スポーツボランティアの活動を通じたイメージ（価値観）の変化要素は、「F1.障がい者イメージ」、「F2.スポーツイメージ」、「F3.ボランティアイメージ」、「F4.クラブイメージ」の4要素であることが確認できた。また、全体的には、すべてのイメージ（価値観）の変化は高い傾向がみられた。さらに、参加内容別では、「教室」参加者は、「イベント」参加者よりも「F2.スポーツイメージ」、「F3.ボランティアイメージ」、「F4.クラブイメージ」要素が高い傾向であることが明らかとなった。

3 参加内容による参加動機およびイメージの変化の差異

本調査の結果、「教室」参加者は、「イベント」参加者に比べて、「社会貢献」動機が強い傾向であった。また、「スポーツ」、「ボランティア」、「クラブ」といった多様なイメージ（価値観）の変化が明らかとなった。

4 不安を乗り越える経験

本調査の参加エピソードの結果から、「意思疎通が難しく」、「どのように接したらいいのかわからない」状況から、対象者に「根気よく話しかけたり」、「コミュニケーションの工夫」を図ったり、時には「クラブスタッフの支援」を受けながら「経験（回数）を積む」ことで、不安を乗り越えるボランティアの姿を確認することができた。また、「対象者の変化（成長）をみることができ」、「熱心に取り組む」「対象者の姿に心動かされ」、「一緒に運動・スポーツを楽しむ」、「喜ぶ」ことで、対象者が「自分を受け入れてくれる」経験をしてい

ることが明らかとなった。

5 障がい者スポーツボランティアに対する魅力とモットーを醸成している

本調査における想いの変化の結果から、「一人一人と深く関わり」、「対象者の純粋な心に触れる」ことができる魅力や、「新しい発見ができ」、それは同時に「自分自身を成長させる」ことができるという魅力を感じている。また、活動時に大切にしているモットーとして、「笑顔」であること、「自分も楽しむこと」を心がけるようになっていた。

6 参加継続を希望している

本調査の参加継続希望の結果から、全体では継続希望者が多く存在する。また、継続するための条件として、「仲間（以前から知っている人）の存在」、「対象者（障がい者）の存在」、「自分が参加しやすい場所での開催」、「親身になって接してくれるスタッフ・指導者の存在」などが明らかとなった。

《研究課題について》

本調査により、障がい者スポーツボランティアの特徴・実態が明らかとなったが、一方では、以下のような課題も明らかとなった。

1 回答者の偏り

本調査は、世代に偏りが見られること、参加内容に焦点化していること、参加内容の因果関係はつかめていないこと、依頼型ではなく公募型のボランティア参加を前提としていること、といった調査の限界がみられる。

2 適応範囲の限定

障がい者スポーツボランティアの活動の受け皿（組織）は多様化している。しかしながら、今回の調査結果の適応範囲は、総合型地域スポーツクラブに限られる。

3 ボランティア・マネジメント機能の検討（特に人材養成の観点から）

本調査は、総合型地域スポーツクラブにおける障がい者スポーツボランティアの継続化を主眼とした調査デザインとなっている。よって、今回の調査は、ボランティアの募集（参加しやすいマネジメント）、養成（人を育てるマネジメント）、継続（継続させるマネジメント）といった本来のボランティア・マネジメントの1機能を探究したに過ぎない。今後は、上記に示した、募集、養成、継続といった一連のボランティア・マネジメント過程の探求およびボランティアの成長過程、いうなれば、ボランティアリーダーの養成等を視野に入れた探求が求められる。